

# アリストテレスと龍樹

## 東洋と西洋哲学比較研究

池端秀雄

もしアリストテレスがインドに生まれていたら空論の哲学を完成していただろうし、龍樹がギリシャ哲学の伝統を受け継いでいたならば、輝くばかりの水晶のような哲学を完成したであろう。両思想を比較して余りにもその認識方法が論理的である。これはインドゲルマン語族の特徴かも知れない。ここに東西哲学を比較研究というより、普遍的世界思想の淵源を追求して、その思想の構造や哲学的思索の深さや、世界思想としての再認識をはかりたい。

### 一、観照(theoria)と呪法(dhāraṇa)の論理

アリストテレスの「形而上学」や「自然学」はロゴスの観照による体系の所産である。プロティノスは観照について「魂は自然より充実しているから、自然より平静で、それだけにまた観照す

る力も強いのである」と、魂が自己自身のみを観照しながら論理の世界を形成し、魂と自然とかかわりあいの中で一層呪法の論理として止揚される。龍樹の「呪法の論理」は超論理と超自然的方法による絶対知の「魂と自然」の一致でもある。ライプニッツは「精神を完成し神を発見するための方法」として自然の無限性の中に近代科学精神を埋没せしめた。同じように龍樹は「空論」で浄化して大乘仏教を確立した。

### 二、浄化としての形而上学の完成

アリストテレスの形而上学はプラトンのイデアを否定した「有」の論理とすれば、龍樹は空論に根ざした「無」の形而上学である。古代哲学者達は「魂の浄めのため」の思索であり、呪法であった。知性によって神を認識することが形而上学の使命であり、神は純

粹な形相、の自己認識に外ならないのである。ニコライハルトマン (NICOLAI, HARTMANN) は十九世紀の批判主義から脱脚する方法として、神と世界と魂 (精神) の統一をとりあげている。

### 三、ロゴス (Logos) とダラニイ (dharani) の弁証法

古代論理は弁証法以外に存在しない、無記号、無言語による自己への語りかけでロゴスとダラニイの論理なのである。ヤスパースは「インド論理学が発展したのは弁証法である。無執着の境地における完全な解脱は、この弁証法によってはじめて理解される。」一方アリストテレスはロゴスの展開過程として弁証法が存在するとのべているが、ギリシャ語のロゴスの動詞 (Lagein) からの変種で集める意味から統一作用とも考えられる。インド弁証法からして呪法、呪詞、呪文等はロゴスにあたる。木村泰賢は「大乘思想は南印と北印の空と有を合流しながら弁証法的に世界に発展し、龍樹の中観論五百偈の諸思想が弁証法によって統一されている」と結んでいる。

### 四、知性と空性による自然汎神論

空性は知情意の未分化の状態にすぎない。東洋と西洋の思惟方法を比較して、空性 (靈性) を一者と見るか、多者と見るか、空性 (無) そのものと見るかによってその特質も明らかになる。「知

性と空性」の関係をプロティノスは「華嚴經」の盧舎那仏を想像させるような説明をしている。「知性はこのものの肖像なのである。ちようどまた日光の太陽に対する如き、自己自身の方をふりむいて、完全に見てしまふはたらきが知性である。」私はこの説明は東洋的汎神論に過ぎない世界観と呼びたい。アリストテレスの「神即自然」、龍樹の「自然即空性」の自然汎神論と考えるなら *Deus sive Natura*、ヘーゲルは「東洋の神」として *horigen-Ianaisch* と呼んで思想の統一に目をむいている。

(いけはた・ひでお、哲学、秋田県立二ツ井高校教諭)